

赤司千恵¹: 2016年IWGP (パリ) 参加記Chie Akashi¹: Report—The 17th International Work Group for Palaeoethnobotany (4–9 July, 2016, Paris)

IWGP (International Work Group for Palaeoethnobotany) は、3年に一度ヨーロッパ各地の研究機関がホストとなって開催している植物考古学の国際学会である。設立当初はヨーロッパの研究者を中心とした集まりで、それもヨーロッパと中近東の遺跡に関する研究発表が多かったというが、2016年7月4～9日にパリで行われた第17回目のIWGPは、前回のテッサロニキにも増して国際色豊かなプログラムとなった。

オーガナイザーはアラビア半島などを専門とする M. Tengberg 氏、会場となったのはカルチュ・ラタン地区にある国立自然史博物館内の植物園である。これまでのIWGPでは全てのセッションが同じ会場で行われていたが、今回の3日目と4日目については、IWGP 史上初めて会場を二つに分け、同時並行で二つのセッションが進行する形が取られた。年々発表のエントリー数が増加していて、単一の会場では間に合わなくなったためである。両会場がやや離れていたのが容易に行き来することができず、ヨーロッパのセッションの多くを聴きそびれてしまったのは残念だったが、参加者の増加や取り上げられる地域やテーマの多彩さを考えれば、当然の流れと言える。

100本を超える口頭発表は、例年通りヨーロッパやアジアの発表が大半を占めたが、東アジアや南アジア、アメリカ、島嶼部などのセッションも設けられ、幅広い地域をカバーしていた。テーマセッションには、「狩猟採集民」「植物と儀礼」「古DNA」「果樹利用」「民族植物学」などがあつた。参加者の出身国は北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカと、6つの大陸にまたがっている。日本からの参加者は7名で、その他のアジア諸国では中国、インド、トルコからの研究者が参加した。

ポスターセッションでは、約90本の発表があつた。セッションごとに3回にわけて掲示されたので、それぞれの掲示期間は2日間ほどだった。口頭発表の会場からは少々遠かったが、植物園内では火災防止規定の関係で掲示できなかったという。毎日ランチタイムの後半1時間が、コアタイムとして設定された。

西アジアを専門とする筆者にとって個人的に興味深かつたのは、やはり南西アジア新石器時代のセッションである。近年の政治情勢から、シリアに関する発表が激減した一方で、中央アジアやコーカサス、インドなど広範な地域に関する発表があつた。

最初にアナトリア先土器新石器時代(前10～8千年紀)の遺跡についての発表が、立て続けに3本あつた。C.



図1 メイン会場 (那須浩郎氏提供)。



図2 パラレル・セッション会場。

Rosner 氏らによるキョルティック・テペと丹野研一氏らによるハサンケイフ・ホユックは、農耕起源の「核地域」(Lev-Yadun et al., 2000)とされる南東アナトリアの遺跡である。しかし両遺跡からの植物資料にはムギ類農耕を示すものはなく、改めて核地域説の見直しが求められている。また、M. Ergun 氏によるアシクリ・ホユック遺跡に関する発表では、6倍体の特徴を持つ裸性コムギの穂軸がかなり早い時期から出土していることが報告された。前回のIWGPでも裸性コムギに関するセッションが設けられたが、未だ議論が続いている6倍体コムギの起源に関する重要な資料と言える。

コーカサス関連の発表は筆者を含めて3本だけだったが、イラク・クルディスタンとともに近年発掘が活発な地域であり、これまで研究が進んでいなかったこれらの地域の研究成果が、次回のIWGPでは続々と発表されることが期待



図3 ポスター会場。



図4 ワインパーティ (那須浩郎氏提供)。

される。

東アジアセッションも盛況で、細谷葵氏が司会を務め、渋谷綾子氏と那須浩郎氏を含む5名の発表があった。縄文や新石器時代中心の、まとまった印象のセッションとなった。これまでのIWGPにおける東アジアの発表も、先史時代を扱うものがほとんどだったが、ヨーロッパや南西アジアのセッションでは中世以降の発表も多いので、同時代の日本に関する研究も興味を引くのではないかと思う。

「食べ物」セッションで面白かったのが、L. Gonzalez Carretero氏による穀類のcakeやfood remainの欠片に関する研究だった。これらは西アジア各地の遺跡からしばしば出土してはいるが、詳しく報告されることはほとんどない。発表ではあまり踏み込んだ結論を述べてはいなかったが、「パン」や「粥」らしき遺存体が多いようで、成果が出版されるのが楽しみである。ポスターセッションでも、C. Herbig氏らがドイツ前2～1千年紀の食品残渣を扱っており、こちらは「麺」も認められるという。

イベントにも趣向が凝らされていた。初日のウェルカム・ドリンクは、リニューアル・オープンしたばかりの人類博物館内で行われ、展示室も観ることができた。3日目の夜には、M. Ross氏持参の大量の自家製ワインでサプライズ試飲会が開かれた(一晩では消費しきれず、5日目の夜にもワインパーティが持ち越された)。4日目の夜には有名なカフェLa Coupoleで、ディナーと恒例のダンスパーティがあった。

最終日はエクスカーションで、ベルサイユ宮殿のそばにある「王の菜園」を訪ねた。この菜園はもともとルイ14世の頃に、王宮に供する食材を栽培するために作られたものである。現在でもフランスらしく幾何学的な区画のなか



図5 エクスカーション (王の菜園)。

に、多種類の野菜や果樹、希少品種なども栽培し続けている。ガイドに伴われて、一般公開されていない部分もみることができた。サンドイッチでランチのあとは、ベルサイユ宮殿外の庭園を自由散策した。どちらも標本採集や遺跡見学ができる場所ではなかったが、ピクニック好きなフランスらしいエクスカーションだった。

次回は2019年、イタリア半島の踵にあたるレッツェで開催予定である。

<http://www.palaeoethnobotany.com/index.php>

引用文献

Lev-Yadun, S., Gopher, A. & Abbo, S. 2000. The cradle of agriculture. *Science* 278: 1312-1314.

(¹〒113-0013 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学総合研究博物館, 日本学術振興会特別研究員PD)